



日本赤十字社 和歌山医療センター

Japanese Red Cross Society

医療連携だより

春号

No. 85



和歌山市小松原通四丁目20番地
TEL : 0120-965-582 (医療連携課)
FAX : 0120-937-510 (医療連携課)

(発行責任者)
管理局長 内田 一彦
e-mail : renkei@wakayama-med.jrc.or.jp

就任のご挨拶



副院長 兼
がんセンター長 兼
腫瘍内科部長
杉田 孝和

この度、4月1日付で副院長を拝命いたしました。1987年に京都大学を卒業し、1年間京都大学胸部疾患研究所で研修したのち、1988年に当センターの前身である和歌山赤十字病院の呼吸器内科に着任いたしました。それから約35年間、当センター一筋に勤務してまいりました。着任当時、和歌山には呼吸器内科を標榜する病院がほとんどなく、和歌山赤十字病院におきましても1984年に呼吸器相談室として呼吸器診療が始まり、私が着任したころには先人の先生方の尽力により、正式に呼吸器内科として診療が行われ始めていたという状況でした。その後、呼吸器内科は和歌山の呼吸器疾患診療の中核を担う診療科に発展してまいりました。また病院としては私が着任時、呼吸器内科の病棟は4階建ての古い病棟の中にあり、救命救急センターも開設して間もない時代でした。その後1995年に13階建ての南館が竣工し、その年に和歌山赤十字病院から日本赤十字社和歌山医療センターに名称が変わり、2011年には現在の本館が竣工され現在に至っております。呼吸器内科の発展に関与させていただいていること、当センターのこうした沿革の中にあることが出来たことを幸せに思っております。

この間、医療は目覚ましい進化を遂げ、呼吸器疾患領域では、肺がんの薬物療法においては、分子標的薬の登場により、個別化治療が行われるようになり、また免疫チェックポイント阻害薬の登場によりさらに新たな治療の変革がもたらされています。また肺がんに対しての手術、放射線治療、薬物療法を組み合わせた治療も進化してきており

ます。難治性喘息治療においては、生物学的製剤が登場し、COPDに対しては吸入療法の進化、呼吸リハビリテーションの推進等が行われ、間質性肺疾患においては、抗線維化剤が使用されるようになってきています。以前に比し、高度で質の高い医療が行われるようになってきており、患者さんのQOLや予後の改善が認められています。こうした医療の進化はどの疾患領域においても言えることと思われまます。

現在のこうした医療を実践していくにあたって、チーム医療がさらに重要となっています。当センターにおきましては、2021年1月にがんセンターが開設し、がん医療のさらなる強化が行われています。がんセンターでは、検診から診断、治療、ゲノム医療、救急、緩和医療、患者支援、情報発信に至るまで、包括的ながん医療を提供する体制が整えられ、各部署で多職種によるチーム医療が行われています。がん治療におきましては、がん診療のエキスパートが診療科の枠を超えて臓器別に結集し、患者さんの意向を尊重しながら、最良の治療法を決定するチームとして臓器別がんユニットが設けられています。例えば肺がんユニットでは、毎週1回、呼吸器内科、呼吸器外科、放射線治療科の医師が協議を行い、患者さんにとって最良の治療方針を決定しています。また通院でがんの薬物療法を行う薬物療法センターでは、医師、看護師、薬剤師、管理栄養士など多職種が関わり、がん治療における様々な問題に対して支援できる体制としています。同じように、どの診療分野におきましても、必要に応じて、その医療に関わる多職種の医療従事者が相互に連携、協働し、それぞれの専門性を発揮し補完しあいながら最善で質の高い医療を提供していくよう努めております。

また同時に患者さんの在宅における生活の質の向上や望む生き方などに寄り添うことなども考えていかなければなりません。地域の先生方をはじめ地域の医療従事者の方々との医療連携も一つのチーム医療であり非常に重要と思われまます。かかりつけの先生方と当センターを患者さんが行き来する循環型医療連携や、在宅終末期ケア・在宅栄養管理などの在宅支援型医療連携等におきまして、皆様のご意見ご協力をいただきながら、当センターの役割を果たしていき、患者さんに最良の医療が届けられるように努めてまいりたいと思ひます。

今後ともご指導、ご鞭撻の程よろしくお願ひ申し上げます。

就任のご挨拶



副院長 兼
産婦人科部長
吉田 隆 昭

この度、4月1日付で日本赤十字社和歌山医療センター副院長を拝命いたしました。

1990年に私が当センター産婦人科に赴任しました当時の部長は森下義夫先生でした。先生からは色々教わりましたが、その一つに「See it, do it and teach it」という理念があります。すなわち、まず見て、次に自分でやってみて、その次に他の人に教えろということで、私はこれを礎に30数年間当センターで働いて参りました。赴任当初から科内で若手を育てるにあたり、この考え方は役に立ったと感じています。役職に就いてからは技術面のことだけではなく、「see」システムの悪い部分を探し出し、「do」改善し、「teach」広めることにも繋がることに気付き実践してきました。

2020年からは院長補佐として医療連携にも携わってきましたが、最初に感じたことは紹介元への返書すらできていない、できていても作成が遅く「顔の見える連携」とは程遠い状態でした。そこで、医療連携課と協力し初回返書や最終返書が遅い場合は担当医師に督促をかけ、経過が長い場合には中間返書を作成するように促しています。その結果、最近では徐々に返書率は改善しつつあるとは思いますが、返書内容に関しても一層充実させ、紹介して頂いた患者様の情報を提供して満足して頂けるものにしていかなければならないとも感じています。

当センターでは逆紹介をこれまで以上に推進するために、昨年の3月に「かかりつけ医 相談窓口」を新設しました。これは患者様にかかりつけ医を持っていただくために医療機関を紹介するための窓口ですが、これにはメディマップというシステムをタブレットに入れて使用しております。地方厚生局の情報を基に全国16万件の医療機関情報がデータベース化されていて、これは月に1

回更新されていきます。さらに、それを基に当センターからの地域の医療機関や介護施設への施設情報に関するアンケート結果も追加して、データベースに入れていきます。医療機関のMAP検索もできますので、かかりつけ医の紹介だけではなく退院支援の案内にも活用しています。患者様にはネットワーク会員様の施設を優先的に紹介しています。前述の通り、このデータベースを充実したものにしていくためには、アンケート結果を基にさらに情報を入れていかなければなりません。アンケートが送られてきた際には回答にご協力をお願いします。

昨年の10月、3年ぶりに集合型で医療連携ネットワークの集いを開催しました。これまでは新たに就任した部長を紹介するという意味も含め新任部長に講演を依頼してきましたが、会員の先生方の意見も聞けるように「医療連携について もっと日赤こんなことやってよ」というタイトルでパネルディスカッションを行いましたところ、予約対応、診療、紹介状返書などについて様々な意見を頂きました。活発に意見交換が行われたことに関して参加者からは好評を得ることができたと感じています。さらに「顔の見える連携」に近づけるように新型コロナウイルスが収束していけば以前開催していたような診療科別の小規模な意見交換会も徐々に開催していきたいと考えています。

予約センターの受付は平日9時から19時に加えて、6年前からは土曜の9時から13時にも受付するようにしています。これまでは当センター最終受診日から1年以上経った新患に対してだけ予約を取っておりましたが、昨年の1月からは最終受診日から1年未満の患者様に対しても予約を取るようになりました。CT、MRI、骨密度に関してはオンラインで検査予約を受け付けており、原則、当日中に結果をお返しできるようにしています。またセカンドオピニオンに関しても予約を受けています。

皆様のご意見を元にこのような取り組みを行ってまいりましたが、地域完結型の医療を目指し情報交換がさらに密接にできるようなシステム作りをしていきたいと思っています。和歌山県民は、よく言えば保守的、悪く言えば腰が重く改革にはいつも時間を要しますが、これまでに積み上げてきた良好な人間関係を生かし、力を合わせて地域からもさらに愛される病院になれるように貢献する所存です。そのためには皆様のさらなるご理解、ご協力が必要不可欠ですので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

就任のご挨拶



糖尿病・内分泌内科部長
金子 至寿佳

2023年4月1日付で糖尿病・内分泌内科部長に着任いたしました。

小学1年まで三重県尾鷲市で育ち、和歌山には家族でよく遊びにきたものでした。父の実家がある高知には、串本周りあるいは十津川村を通過して和歌山入りしフェリーで帰省していましたので、和歌山には家族との幸せな思い出があります。これまでに培った糖尿病専門医と内分泌専門医の知識と経験を生かして、思い出の和歌山に貢献したいと考えております。

糖尿病は血液中のブドウ糖をインスリンが肝臓や筋肉・脂肪に移動させることで、血中のブドウ糖濃度は減少し血糖値は下がります。このインスリンを分泌するβ細胞の力は加齢とともに低下していきます。食生活を中心に普段の生活次第でβ細胞に負荷がかかることで加速的に低下し、いよいよインスリンが十分に血中のブドウ糖を適切に肝臓や筋肉・脂肪に移動させることができなくなってきます。その結果血糖値がスパイク状になったり、進行して慢性的に血中に残留することで、全身の動脈硬化が進行します。糖尿病の患者さんは日常生活で深刻な動脈硬化を進行させないように、残存する自身のβ細胞の力で上手にブドウ糖を肝臓や筋肉・脂肪に押し込むことができているか、今のお薬の力を借り続けるので良いのか、を点検し続けること、すなわち通院の継続が大切です。そのためにもかかりつけ医である診療所の先生と病院が連携し、継続的で細やかに地域で患者さんの治療継続を支えるという視点が重要となります。前勤務地の高槻市ではこの視点から全国に先駆け医師会主導の糖尿病医療連携システムを15年にわたって構築・運営し先導して参りました。そしてこの連携システムの構築課程やoutcomeについて日本糖尿病対策推進会議をはじめ、国内外の学会で報告してきました。この経験を生かして和歌

山でも今ある糖尿病医療連携を、急性期病院としての役割に重きをおいてさらに良い方向に発展させることができるよう尽力したいと考えております。

内分泌疾患は、高血圧、糖尿病や不定愁訴などの症状であることも多く Common disease に埋もれて見逃されがちです。施設入所中の80歳代女性が食事をとれず低Na血症となって寝たきりになっているとご紹介を受けました。病歴聴取と初診時の血液検査から、食事がとれない理由として副腎不全を疑い負荷試験を行って副腎不全と診断できました。ホルモン補充療法を行った結果、食事もとれるようになり寝たきりであったのが自分で座位になることもでき、リハビリで立つことができるようになりました。その他にも難治性の高血圧の原因が原発性アルドステロンであったり、副腎不全を合併する副腎腫瘍について検査を進め適切な科に効率よく回っていただくなど、内分泌専門医としても医療連携を通じて地域に貢献していきたいと考えております。

社会に向けては、日本糖尿病学会第4次「対糖尿病5ヵ年計画」で作成委員を務め「国民への啓発と情報発信」を担当しました。生活習慣病も内分泌疾患も過去と未来に対する視点が大切です。また2型糖尿病は将来の発病予防という観点をもった小中学生に対する食育も重要です。2010年からは小児期での食育を推進する活動を開始し、最近では「健康リテラシー」を育てる教育の重要性を唱え、地域の小中学校への出前授業や教員への健康教育を広げる活動を行っています。2021年には日医総研ワーキングペーパー「健康リテラシー涵養のための試行～何を伝えるか、どのように伝えるか～」を報告しました。内分泌疾患は慢性疾患と関係が強く、とくに小児科からのトランジションでは大人社会の生活習慣が重要です。この点においても、疾患と仕事の両立のため患者さんへの健康教育とともに地域の先生との連携が鍵となります。

個人の心身の健康は、組織や社会の健康をもたらします。このような活動を通じて健康な社会が健全な人を育てるといった正のスパイラルを維持するために、この和歌山で尽力いたします。

最後に食事は日々の潤いを与えてくれる大切な時間です。楽しいけれど糖尿病の不利益を感じることはない治療を、地域の先生方や地域の先生方の元にお勤めされている各職種の方々とともに、チームで楽しく患者さんに届けていきたいと考えております。

現在、毎日新聞web版「医療プレミア」に「楽しい！健康力の育て方」と題して毎月「健康リテラシー」を育てる教育の重要性を発信しておりますのでお目通しをいただけますと幸いです。

就任のご挨拶



小児科部長
儘田 光 和

このたび、4月1日付で小児科部長を拝命し、赴任してまいりました。ご挨拶申し上げます。

私は平成7年に京都大学医学部を卒業、大学病院などでの勤務のうち同大学院では小児内分泌学の研究と臨床に従事し学位を取得しました。その後は、一般病院勤務の中で地域医療の実情に触れたことをきっかけとして医療経済に興味を持ち公認会計士資格を取得、大手監査法人で医療関係の会社や大学病院の会計監査およびデューデリジェンスなどを経験したのちに医療コンサルタントとして病院運営のアドバイスをしてまいりました。その中で当センター前々院長の百井亨先生との出会いを通じて、平成24年から4年間当センター小児科に副部長として勤務する機会をいただきました。小児科医として医療に従事する傍ら、医療連携や経営企画の仕事にかかわることができたのは本当に素晴らしい経験でした。そこで培った経験は、日本小児科学会における社会保険委員会での診療報酬提案や働き方改革ワーキングといった活動につながっています。その後しばらくの間当センターを離れていましたが、今回、縁あって再び赴任ができましたこと、関係者の皆様方には深く感謝しております。

さて、小児医療を取り巻く環境はコロナ禍を経て大きく様変わりしてきました。受診控えによる患者数の落ち込みや疾病構造の大きな変化が見られたとともに、発熱外来や病棟での小児特有の感染対策の必要性に伴う負担増に対応を迫られ、昨今はこども達のこころの問題の表面化が大きく問題視されています。このほかにも様々な課題がある中で、われわれは成育基本法の成立やこども家庭庁の創設といった背景を追い風として、高度な医療・安心安全な医療をこれまで通り提供し、地

域との連携を強め、さらには未来を担う小児科医の育成にも注力していく必要があります。

当科は和歌山小児医療圏における地域小児科センターとして質の高い継続性のある小児医療提供体制を構築する役目を担っています。そこで、アレルギー・新生児・血液腫瘍・心臓・神経・内分泌など幅広い疾患の高度な診療に当たるとともに、救急医療を充実させてきました。一方でこのような高度急性期医療を提供し続けるには近隣の診療所や病院との医療連携が不可欠で、この点は今後より一層の充実を図っていくつもりです。入院患者数や紹介患者数はコロナ禍での落ち込みは見られたものの徐々に増えてきており、今後も地域で信頼される小児科を目指し努力を続けてまいります。

厚労省の統計を見ると、2010年から2020年の10年間における小児科の医療施設従事医師数の変化は、全年齢だと2000人以上増加しているのに対して、35歳未満では250人程度減少しており、今後の小児医療を担う若手小児科医の育成が喫緊の課題であることがわかります。小児科研修の点では、当センター小児科は日本専門医機構が定める小児科基幹施設となっており（和歌山県では県立医科大学附属病院と当センターの2施設）、質の高い研修プログラムによる充実した研修が可能と考えています。今後は地域の先生方とも協力しながら、小児科の魅力を若い医師に知ってもらい、小児科を選んでもらえるような取り組みにも力を入れていきたいと思っております。

また、地域を支える診療所や福祉、保健、教育、行政との密な連携は今後より重要性を増してくるでしょう。これまでもわれわれは健診などの保健活動や子育て支援を考える会など院外での活動を行ってきました。しかしこどもたちに関わる問題は家庭や保育、学校などさまざまな生活環境全ての場所で生じています。貧困や虐待といった社会問題含めて、「こどもの代弁者」たるべき小児科医の役割は医療だけにとどまらなくなっています。院内では保護者の方々を含めた子育て環境全体を見渡す広い視野をもった診療を心掛けつつ、小児科医は病院の外へ、もっと地域へと飛び出して活動の場を広げることが求められるのです。そのような幅広い活動を通して地域により一層貢献していけるよう、当センター小児科を育てていきたいと考えています。

それでは皆様、どうぞよろしく願いいたします。

就任のご挨拶



皮膚科部長
米井 希

私は生粋の和歌山市民で、砂山小学校、小4から転校し吹上小学校で学びました。当センターの裏にある、長町公園は子供のころよく友達と遊んだ公園です。そのころからずっとなじみ深かった、いつも家の近くにあった「日赤病院」の一員として勤務させていただけることは、感慨も一入です。その後は西和中学校、桐蔭高校に進学し、平成11(1999)年に和歌山県立医科大学を卒業しました。平成15(2003)年より2年間は、修練医として当センターにお世話になりました。

特別な専門分野というのをございませませんが、皮膚疾患については何でも全般に積極的に診療していきたいと考えております。最近では、皮膚疾患(とくに皮膚科外来の約1/4を占める湿疹皮膚炎群)はなぜ誘発されるのか、例えばアトピー性皮膚炎は戦前にはほとんどなかった病気であり、過度の清潔志向からアトピー性皮膚炎が増えたと言われていますが、果たしてそれだけだろうか、また皮膚疾患に限らず、どうしたらいろいろな病気を予防していけるのか、ということに考えをめぐ

らせております。健康という一番大切な幸せを守るために、病気予防の意識を各個人が高めていくことが必要と考えています。しかしさまざまな要素があり、一筋縄ではいかないことも承知しております。昭和34(1959)年に和歌山赤十字病院で第一内科部長を務められ、その後31年間、「公害教室」を開催された汐見文隆(しおみふみたか)先生は、心から尊敬する先生のおひとりです。

さて、当センター着任にあたり、人生で初めて名刺を作っていただくことになりました。名刺の原稿を眺めると、当センターの標語「人間を救うのは、人間だ」が目飛び込んできます。これは、スイスの実業家で国際赤十字創設者であるアンリ・デュナン(1828.5.8-1910)の残した言葉だそうです。この言葉が、改めて胸に染み入る時代だなあ、と感じます。というのは、昨今、あらゆる分野でデジタル化や人工知能AIの活用が叫ばれており、医療や介護の分野も例外ではなく、AI診断や介護ロボットの開発、マイナンバーカードと一体化した保険証等により個人の病歴がすべてデジタル管理されかねない時代になっているからです。それは、内閣府のムーンショット計画にある様に、国策(あるいは世界的政策?)として進められようとしています。本当にこれらが人々の幸福につながるのでしょうか。私は時代遅れの人間といわれようとも、やはり、「人間を救うのは、(AIでもアバターでもロボットでもなく、デジタルによる効率化でもなく)、人間だ」と思うのです。

むしろ私は、古代ギリシャにさかのぼって、医学の父ヒポクラテス(BC 460-375)の格言の重みを、噛み締める昨今です。改めて、ここにご紹介いたします。私も、患者さんの治癒力を促すような医療をめざしたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

【ヒポクラテスの格言】

- ・「火食は過食に通ず」
- ・「満腹が原因の病気は空腹によって治る」
- ・「月に一度断食をすれば病気になる」
- ・「病気は神が治し、恩恵は人が受け取る」
- ・「汝の食事を薬とし、汝の薬は食事とせよ」
- ・「人は自然から遠ざかるほど病気に近づく」
- ・「病気は食事療法と運動によって治療できる」
- ・「食べ物で治せない病気は、医者でも治せない」
- ・「人間は誰でも体の中に百人の名医を持っている」
- ・「賢者は健康が最大の人間の喜びだと考えるべきだ」
- ・「病人の概念は存在しても、病気の概念は存在しない」
- ・「健全なる体を心掛ける者は完全なる排泄を心掛けねばならない」
- ・「食べ物について知らない人が、どうして人の病気について理解できようか」
- ・「人間がありのままの自然体で自然の中で生活をすれば120歳まで生きられる」
- ・「病人に食べさせると、病気を養う事になる。一方、食事を与えなければ、病気は早く治る」
- ・「病気は、人間が自らの力をもって自然に治すものであり、医者はこれを手助けするものである」



図1 十字の形に記された、ヒポクラテスの誓い

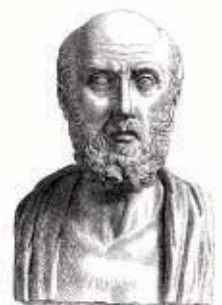


図2 ヒポクラテスの肖像

院長補佐のご紹介

令和5年4月より伊藤 哲之泌尿器科主任部長が院長補佐に就任しました。

中大輔救急科・集中治療部長、池上達義呼吸器内科部長、梅岡成章放射線診断科部長とともに4名体制で院長補佐の業務を遂行します。



伊藤哲之 院長補佐 兼 泌尿器科主任部長

和歌山に異動してきてから5年が経ち、4月から院長補佐を再び拝命しました。患者さんにとっては最高の、地域の先生方にとっては最良のパートナーであり続けられるように、信頼される医療の提供を継続できる体制作りに貢献したいと考えております。また施設間、職種間の垣根を低くして、地域にも当センター職員にも愛される医療センターを目指したいと思っております。皆様のご支援をよろしくお願いいたします。



がんセンター通信 ⑨

(婦人科がんユニット)

産婦人科部副部長

山西 優紀夫



医療連携施設の先生方、日頃より多くの患者さんを当センターへご紹介をいただきまして感謝を申し上げます。

婦人科領域においては、各ガイドライン、または最適と思われるエビデンスに沿って治療や検査を提示しています。子宮体がんは、本邦において年々増加傾向のがんですが、I期で発見されることが多く、ロボット支援下手術を含めた腹腔鏡下手術を行うことが増加しています。

子宮頸がんは、HPVワクチン接種をはじめ、子宮頸がん検診など皆さまには大変お世話になっております。HPVワクチンは2価、4価ワクチンに加え、9価ワクチンも令和5年の4月から定期接種で使用できることが厚生労働省より発表されております。先生方におかれましてはご対応を頂ければ幸いです。また、初期の子宮頸がんに対する腹腔鏡下手術（準広汎～広汎子宮全摘）は、適応を限定して対応しております。がんに対する腹腔鏡下手術では患者さんに十分な説明の元、腫

瘍の拡散に注意と工夫を行っています。さらにI B1期以上であれば放射線治療医と連携しながら患者さんの希望に沿って治療を提示しています。卵巣がん（卵管がん・腹膜がん）はIII期以上（腹腔内播種がある状況）の進行期で発見されることが多いがんです。卵巣がんは薬物療法（PARP阻害薬）の進歩に合わせて、手術に関するエビデンスも蓄積されつつあります。当センターでは消化器外科と協力して腸管合併切除を含めた大きな手術を安全に準備することが可能であり、適切な患者さんへ提供できるように準備しています。妊孕性温存希望に関してはガイドラインに沿って提示しております。その他、再発がんや希少な婦人科がん、遺伝性が疑われるがんに対しても腫瘍内科、遺伝診療科とも連携し、患者家族さんへ適切な治療や検査を提示しています。患者さんが最適な医療を選択できるように全力で準備して参りますので、今後ともご指導ご鞭撻の程、何卒よろしくお願いいたします。

令和4年度診療科別合同セミナー・講演会実施一覧

当センターでは、各種講演会を実施しています。開催時には、随時ご案内しますので是非ご参加ください。

日時	診療科	会合・講演会名	場所	参加人数 (合計)
1月17日(火)	腎臓内科	第1回腎代替療法施設連携の会	日本赤十字社 和歌山医療センター	17名
1月20日(金)	呼吸器内科	呼吸器疾患カンファレンス	WEB 配信	25名
1月26日(木)	呼吸器内科	肺 MAC 症セミナー in 和歌山 日本赤十字社和歌山医療センター病診連携の会	WEB 配信	43名
1月30日(月)	糖尿病・内分泌内科	糖尿病と高血圧治療 Seminar	WEB 配信	22名
2月16日(木)	循環器内科	和歌山心不全診療 UP DATE Seminar	WEB 配信	34名
2月17日(金)	腎臓内科	高血圧診療 Up To Date	WEB 配信	31名
3月9日(木)	感染症内科	令和4年度第4回感染対策向上加算に係る 合同カンファレンス	WEB 配信	119名
3月14日(火)	脳神経内科	PD Meeting in Wakayama	WEB 配信	25名
3月16日(木)	整形外科	令和4年度第3回大腿骨頸部・転子部骨折地域 連携バス合同カンファレンス	WEB 配信	48名
3月23日(木)	脳神経外科	令和4年度第3回脳卒中地域連携バス情報交換会	WEB 配信	64名
3月23日(木)	乳腺外科	第17回 Breast Cancer Network Construction Seminar	WEB 配信	16名
3月28日(火)	腎臓内科	和歌山市のCKD地域連携に関する意見交換会	WEB 配信	6名
3月30日(木)	循環器内科	心不全治療フォーラム in 和歌山	WEB 配信	35名

医療連携課では、地域の先生方とよりよい医療連携ができるよう日々邁進しております。診察予約、検査予約に関すること、ご紹介患者さんの返書、情報提供依頼、登録医に関すること、勉強会・意見交換会、その他医療連携に関すること、お問い合わせ、お困りの事等ございましたら、いつでも医療連携課までご連絡ください。

TEL : 0120-965-582 (医療連携課) 【平日9時~17時30分】

TEL : 0120-936-385 (予約センター) 【平日9時~19時 土曜9時~13時】

FAX : 0120-937-510 (医療連携課・予約センター 共通)



退職のお知らせ

3月31日付

消化器外科部	宇井	山上	志朗	(副院長)
糖尿病・内分泌内科部	井辻	岡井	元馨	(副院長)
皮膚科部	浦田	中村	二博	(部長)
消化器内科部	田木	村畑	俊康	(副部長)
血液内科部	濱	西井	博哉	(副部長)
耳鼻咽喉科部	箕	川	悟之	(副部長)
小児科部	福	石	矢之	(副部長)
麻酔科部	石	原	浩訓	(副部長)
呼吸器外科部	原	枝	剛博	(副部長)
呼吸器外科部	森	村	樹人	(副部長)
循環器内科部	田	村	実人	(副部長)
消化器内科部	大	西	秀貴	(副部長)
消化器内科部	伊	田	英俊	(副部長)
血液内科部	油	居	孝人	(副部長)
産婦人科部	中	山	郁人	(副部長)
泌尿器科部	上	野	知宗	(副部長)
整形外科部	室内	谷	孝大	(副部長)
放射線診断科部	坂	川	涼典	(副部長)
脳神経外科部	吉	本	樹之	(副部長)
感染症内科部	森	田	也真	(副部長)
救急科・集中治療部	森	北	一優	(副部長)
救急科・集中治療部	北	井	織子	(副部長)
循環器内科部	井	上	弘樹	(副部長)
循環器内科部	山	本	基也	(副部長)
消化器内科部	安	谷	一也	(副部長)
消化器内科部	山	井	々々	(副部長)
消化器外科部	室	田		
眼科部	玉	原		
耳鼻咽喉科部	櫻	田		
産婦人科部	古	本		
整形外科部	北	濱		
歯科口腔外科部	平			
放射線診断科部	濱			
放射線診断科部				
呼吸器内科部				
脳神経内科部				
救急科・集中治療部				

上記の職員が退職いたしました。
大変お世話になりました。

就任のお知らせ

3月1日付

眼科部 原田康平 (医師)

4月1日付

小児科部	儘	田子	和佳	(部長)
糖尿病・内分泌内科部	金	井	希久	(部長)
皮膚科部	米	葉	一介	(部長)
呼吸器外科部	千	森	明朗	(部長)
呼吸器内科部	阪	江	人里	(部長)
産婦人科部	寒	本	奈文	(部長)
乳腺外科部	河	村	太祐	(部長)
泌尿器科部	松	田	志偉	(部長)
眼科部	吉	木	美佳	(部長)
感染症内科部	吉	井	弘保	(部長)
血液内科部	前	上	世裕	(部長)
呼吸器外科部	赤	山	光希	(部長)
耳鼻咽喉科部	甲	実	莉哉	(部長)
循環器内科部	鈴	川	香樹	(部長)
小児科部	松	木	介暉	(部長)
腎臓内科部	前	尾	郎健	(部長)
脳神経外科部	見	岨	平貴	(部長)
放射線診断科部	大	神	大左	(部長)
眼科部	田	中	人平	(部長)
形成外科部	成	山	維嗣	(部長)
形成外科部	広	根		
産婦人科部	西	野		
産婦人科部	元	川		
歯科口腔外科部	金	木		
耳鼻咽喉科部	山	尾		
呼吸器外科部	山	岨		
消化器外科部	鳴	神		
消化器外科部	山	中		
消化器内科部	椿	山		
消化器内科部	曾	根		
消化器内科部	坂	野		
消化器内科部	押	川		
消化器内科部	久	保		
消化器内科部	佐	藤		
整形外科部	岩	本		
整形外科部	小	竹		
脳神経内科部	山	田		
泌尿器科部	丸	野		
放射線診断科部	西	中		
放射線治療科部	立	石		
麻酔科部	中	村		
救急科・集中治療部	杉	野		
救急科・集中治療部	山	下		
救急科・集中治療部	近	藤		
救急科・集中治療部	村	上		
小児科部	道	網		

上記の職員が新たに就任いたしました。
よろしくお祈りいたします。